

《書評》

Stefan Collini,

The Nostalgic Imagination: History in English Criticism

Oxford: Oxford UP, 2019.

田中 裕介

本書は、著者ステファン・コリーニが担当した、オックスフォード大学のフォード講座「イギリス批評における歴史」(2017年度)の一連の講義を書籍化したものである。書籍の副題でもあるこの講義名は、その簡潔さにもかかわらず、深い企みを潜めているようにも思える。アメリカ出身のT・S・エリオットからウェールズ出身のレイモンド・ウィリアムズまでを対象とするのであれば、English criticismを「イングランド批評」とするのはややためらいを覚えるが、一方で分析対象が文学批評の刊行物であるかぎり許容されるかもしれない。著作物の分析に主眼があることを考慮すれば「英語批評」という解釈も思いつくが、訳す場合は「イギリス批評」としておいた方が無難だろうか。また、historyにも身構えてしまう。コリーニは本文中で例えば以下のように述べる。「狭く慣習的な意味での歴史へのエリオットの批評の関与は黙殺されてきた」(28)。本書における「歴史」は、この「狭く慣習的な意味」、つまりほとんど一般的な通念と同じ意味で用いられている(そうでない箇所は、ウィリアム・エンブソンについて記述した125ページなどのように丁寧に説明している)。19世紀末に設置されたこの講座は卓越した歴史家が代々担当する習わしであるかぎり、「歴史」を保守的な意味であっさり扱っているのも首肯けるが、この表面的なさりげなさは、非常な学問の重みを備えているというべきであろう。ドナルド・ウィンチ、ジョン・バロウとの共著『かの高貴なる政治の科学』(1983年)以来一貫して「知性史」(intellectual history)に携わってきた歴史家とし

て、コリーニはこの「狭く慣習的な意味」に自己限定することにこそ自らの学問の基軸を設定してきたのだ。とするならば、彼にとって「歴史」は、同語反復的に「歴史家」によって書かれるものと定義するより他ないのかもしれない。通常は文学批評家ないしは文学研究者として扱われるT・S・エリオット(第1章)、F・R・リーヴィス(第2章)、バジル・ウィリー、L・C・ナイツ(第3章)、ウィリアム・エンブソン(第4章)、Q・D・リーヴィス、リチャード・ホガート(第5章)、レイモンド・ウィリアムズ(第6章、第7章)がすべてその著作において「歴史」を記述していたという意味で「歴史家」として扱われるのである。

読みどころは枚挙にいとまがない。各ページにテキストの鋭利な読解と「知性史」の該博な知識から紡ぎ出された創見が盛られている。歴史的な文脈から切り離された方法論に基づくニュー・クリティシズムの祖と常識的には考えられるT・S・エリオットを扱った第1章では、真っ先に俎上に載りそうな「伝統と個人の才能」への言及はなく、博士号請求論文、クラーク講演、ノートン講演を中心に、19世紀以来イギリスの通俗的歴史観として流布してきたウィッグ史観に代わる「批評的知性史」(37)を書いた人物としてのエリオット像が浮き彫りにされる。しかしこの言い方は不正確だろう。コリーニの対象はあくまでもテキストであり、従来は歴史書とは捉えられていなかった文学批評の著作を緻密に解読して歴史記述の作品として読み替えてゆくのが一貫した彼の方法論なのだから。個々の章は独立して読むことができるが、第1章のエリオットの歴史観が随所において参照枠として絶妙な効果を發揮している。第2章ではエリオットに比べて一貫した歴史を展開したとしてリーヴィスが論じられ、第3章前半では「歴史的背景」を論じたウィリーの研究書が、「感性の分離」という知性史的モメントを導入したエリオットの17世紀観を基礎として、ホワイトヘッドの歴史観を付加した著作として解析される。第3章後半では、資本主義起源論争の口火を切ったナイツ『ジョンソン時代の演劇と社会』が、各時代における人間の生活の質を問う歴史観に基づき、やはり「感性の分離」と資本主義の起源を結びつける視点を提示していたことが指摘される。

第4章が圧巻だ。ニュー・クリティシズムの源泉に位置づけられるエンブソンの作品研究の著作を歴史書に読み替える手さばきにも瞠目するが、

ここでは、エンプソンにはマシュー・アーノルドの負荷がないという首肯するしかない指摘(124)が、ウィリーによるアーノルドの聖書観(86)の依拠への論及と響き合うなど、全巻を通してアーノルド批評が隠れた参照枠として有効に機能していることに気づかされた。またウィリーにおけるラスキンへの言及の不在を指摘したり(87)、リーヴィスの論述をハーバースのそれと類比したり(53)するなど随所に顔を覗かせる知性史を横断する言及も刺激的だ。第5章で論じられるQ・D・リーヴィス『小説と読者』は、ともに18世紀の読者層が「均質」であるという観点を有することから、レズリー・スティーヴン『18世紀におけるイングランドの文学と社会』と結びつけられる(128)。Q・D・リーヴィスは、19世紀初頭における分離の発生を認めて読者層の歴史を扱うという点で、文化的エリートと大衆的な小説を好む他の社会集団の関係の歴史を記述していると解釈されることになる。

コリーニの緻密な知性史的論述の網の目をたどるように第5章、第6章と読み進める中で、遡ってエンプソンを扱う第4章が、見逃せない論点を提示していることに気づかされる。本書の論述の中でも白眉とっていい、エンプソンのプロレタリア文学批判の分析(113-15)は、プロレタリア文学が唯一の文学生産の形式ではなく、任意の一つの形式にすぎないという彼の所見への論及に至るのだが、その過程で、オーウェルやホガートの著作に見られる「共同体」の「牧歌」的性格が炙り出される。この記述が先触れとなって第5章では、ホガート『読み書き能力の効用』が「牧歌」に陥る傾向にあると論じられるのであり、その流れで、第6章では本書の中心をなすウィリアムズ『文化と社会』論が展開されることになるのだ。

大雑把な論者ならば、ホガートとウィリアムズの著作をその「牧歌」的性格という点で串刺しにして能事畢れりということになりかねない。しかしコリーニの両著の扱いは周到をきわめている。まず『読み書き能力の効用』の歴史の語りを二つの水準で説明すると述べて、19世紀初頭以降の都市の労働者階級の形成と変容の歴史と、もう一つ、大衆出版への文学批評の関わりを歴史を挙げ、その議論の歴史的論理の跡づけを行なった上で、この著作を、アーノルド、エリオット、リーヴィスといった文学批評の圏域に位置づけると同時に、カルチュラル・スタディーズの起源の神話から引

き離し、『文化と社会』との差異を明確に記述する。コリーニの指摘によれば、ホガートがその歴史のパースペクティヴにおいて、19世紀終わりと20世紀初めの過剰な平等原理と物質的繁栄がもたらす倫理的墮落を問題視したのに対して、ウィリアムズは、18世紀終わりと19世紀初めに歴史の切断点を設定し、「産業革命」以前と以後を劃然と分ける単純な二分法に陥っているということになる。ここで本書冒頭からウィリアムズに先行する様々な批評家の歴史観に言及していたのは、彼に照準を合わせてのことだったと認識する。例えば、第2章において16世紀の終わりからの社会の変化の記述において、産業革命以前の資本主義の勃興を論じるリーヴィスの歴史観は、暗にウィリアムズの視角の相対的な狭さに対置されているように思えるのである。

第6章冒頭の、culture という語の用法の歴史をめぐるウィリアムズの論述の曖昧さを精密に指摘する議論(159-64)はコリーニの真骨頂だろう。18世紀終わりと19世紀初めを重視する「擬似歴史観」(165)に囚われているウィリアムズの議論は、「ノスタルジアに満ちた有機体論」(174)によって支えられていることから若年時に深い影響を受けた文学批評の域にとどまっているとの見解が披瀝されるのである。苛責ない批評ではあるが、一方で179-80ページの箇条書きでの整理ほど『文化と社会』の企図(と実際の論述との乖離)を明晰に分析した記述を私は知らない。この箇所を読んで初めて、私自身、アーノルドからペイター、ワイルドに至るヴィクトリア時代批評を歴史的に位置づけるにあたり、ウィリアムズを今ひとつ参照しきれなかった理由を理解した。

しかし、この点にいたって本書の構成に関わる大きな疑問が生じる。結局、エリオットからウィリアムズにいたる文学批評家の「歴史」はノスタルジアに染め上げられた想像物であり、専門家の歴史研究の記述には太刀打ちできないものなのか。それを肯定して一面的な結論を下すことを回避するかのように、第7章において、コリーニは、文学は経験の歴史を記述する資料として有効であると明言したあと、学問領域としての「歴史」と「文学」の衝突の歴史を「二つの文化」論争を含めて詳細に紹介する。そして最後に置かれるのは、E・P・トムスンによる「歴史書」としての『文化と社会』に対する評価と欠陥の指摘である。この結論は両義的であろう。一方でコ

リーニは、文学批評が、20世紀以降の専門の歴史家の研究において欠落していた「歴史」を提示してきたことを肯定的に捉えている。しかし言語論的展開以降、歴史記述における言語的性質が重視されてきた学問傾向を考慮すれば、文学批評由来の文化批評が、歴史の因果関係、階級闘争を適切に捉えていないとするトムソンの『文化と社会』評の引用をもって、コリーニが本書を締めくくっているのは示唆的である。ノスタルジアに傾斜する文学批評による歴史への試みには限界があるとしても、文学言語の形式的分析においてこの限界を超えたエンプソンの意義は大きく、ウィリアムズもこのエンプソンの手法を継承した側面において「歴史家」として評価しうるといふことなのだろう。このようにほとんど論者次第というしかないトピックにおいてさえ徹底的に相対化を志向するがゆえに焦点が分散しているように見える論述にもどかしさを覚える読者もいるかもしれない。しかし最終章の慎重な論述に、むしろ私は「狭く慣習的な意味での歴史」へと賭けるコリーニの信念を読み取る。

本書を読み進めるうちに、なぜ私がこれほどコリーニの論述に親しみを覚えるのかを考えていたが、すぐにその謎は氷解した。以前アーノルドの「文化」概念を主題とした博士論文を執筆している際に、数多のアーノルド論の中でその政治的位置の捉え方においてコリーニのものがもっとも適切と思われ、その *Matthew Arnold* (1994) をこの批評家の全体像を掴む手がかりとして読み込んだことがあったのだ。 *Public Moralists* (1991) などの旧著にも啓発されたが、その後刊行された *Absent Minds* (2006) や *Common Reading* (2009)、そして *What are Universities for?* (2012) は斜め読みで済ませていた。その意味では、本書の精読は、私にとって、学生時代に教えを受けた恩師の講義に列席したような経験だった。この本については、みずず書房から翻訳が刊行予定という慶ばしい情報を得たが、それがたとえ名訳であっても、ヴィクトリア時代の学問的散文の構造をなぞっているかのようなその稠密な英文を味わう快樂をひそかに保っておきたいと思われた。